

「林檎畑」CD・・・、日本の詩とうた、その歌唱

北原白秋、三木露風、川路柳虹、そして金子みすゞ、ほぼ同時代に活躍の詩人たち、世紀末から20世紀初期、自由民権抑圧の強い体制から変わり、大正デモクラシーと呼ばれた時代の中、その多感な時を過ごしたのだろう。芸術の世界でも、統制された一丸の前進ともいうような明治から、解放された民衆の自由パワーのような、いわゆる、大正ロマンといわれる時代が生まれ、彼らは、詩の世界をリードし、その中で孤高の感性を示す。それに旋律が創られ、多くの人々に歌われてきて、この自然な融合自体も、同じく“童謡”と呼ばれる。“童謡”とか“歌曲”とかにかかわらず旋律詩形の新しい世界、それが「うた」その「うた」の紛れも無い中心だった巨星山田耕筰の作になる8曲と、その多くが近年紹介され、現代の子供たちもその世界に触れられることになった、金子みすゞ童謡集から生まれた13曲、星重昭の「うた」が聴ける。そこでも、詩の格調が保たれつつ、同時に、日本語が美しく聞こえることが大切にされる。

CD「林檎畑」に聴ける新保友紀子の21曲の歌唱は、まことに相応しく、天国の詩人たちも喜ばれることだろう。美しく聞こえる日本語こそ「うた」の命、まったく希少な真の歌い手なのだ。それに寄り添うニコラ・ヴァン・ナースのピアノも、各曲の背景や世界を十二分に表現し、歌唱と一体宇宙を作る。2010年秋には星の前奏曲集から初演も行っており、日本人以上の貴重な感性を感じられよう。

この音楽を聴く時、不思議な何かの新しい発見があり、それが現代生活の中、“当たり前”ではない、探していた潤いや大切なものを、そっと連れてきてくれる筈、幸いだろう。

二人のジョイントリサイタルは2011年7月10日、もしや人々は、金子みすゞ童謡曲集初演他、「日本のうた」の神髄というものに、初めて接することになるのかもしれない。

(作曲家) 星 重昭